

1 「学習のわざ委員会」の新設

委員会活動は、子供の主体性・自治能力・問題解決力を育てるためにある。これまでその活動に「学習活動」へ直接影響するような委員会がなかった。授業は教師が行うという強い考え方があったからだ。そこで元勤務校は、子供自身が学びを創ると考え、「学習のわざ委員会」を設置した。ノートコンテストの推進、「授業進行係り」の設置、学習言語わざの状況調査等を主な活動とした。教師が校内研修で行ってきたような内容を子供たちの「学習のわざ委員会」が担った。

(1) ノートコンクール及びノート大賞

ノートコンクールは、子供にノートの取り方や学び方のモデルを示し、ノート作りの意欲を高めるために行った。そのノートコンクールは、担任と学習のわざ委員会が担った。組の代表児童を選出し、委員会活動で選考する仕組みだ。選考基準として低学年は、後で読んでも分かる字で書いているとした。中学年は、理由をつけて自分の考えを書いたり、友達の良い考えを書いたりしているとした。高学年は、分かったことや考えたこと、友達の考え等を生かした振り返りを書いているとした。選考対象は、ノート見開き1ページである。年2回（6月、11月）行った。



ノート大賞は、「授業ノート」「家庭学習自学ノート」の2部門とした。期間を設け、自推で応募する形式をとった。「授業ノート」の評価基準を、「ノート一冊そのものがノートコンクールの評価基準に準じて作成されている」とした。「家庭学習用ノート」は、考えたことが、各学年の目標（低学年は筋道たてて、中学年は要約して、高学年は論理的に書かれているもの）が記載されていることとした。ノートコンクールの運営を子供が担うことにより、学校全体の子供のノートが良いものとなった。

(2) 授業進行係

授業力は、誰が付ける力だろう。これまで教師が付ける力と、とらえていた。だが、教師主体の授業は、「子供同士が学び合い、自ら考え表現しながら本質的な学びを生み出す授業」とはならない。子供が教師を頼らず仲間と協働して創る授業が出来たとき、はじめて授業は成立する。学習指導要領総則にも「指導にあつては、自主的・自発的な学習が促されるように工夫すること」とある。授業力とは、案外、教師より子供が身に付ける力ではないだろうか。

その方策として、高知県を始め全国の学校に「授業進行係り」の導入を勧めてきた。子供が主体的・協働的に仲間と学ぶための方法となるからだ。これまでの「教科係り」は、担当の教師から持ち物や宿題等を聞き、教室でそのことを伝える役割しかなかった。そこで学習のわざ委員会の事業として、これまでの「教科係り」を「授業進行係り」として各学級に位置付けた。教師の独壇場の授業を止める一つの方策としても導入したかった。

最初は、「授業進行係り」に多くは望まなかった。だが、子供は、「授業進行係り」に慣れるにしたがい、自分たちで授業運営を一層行いたいという思いが強くなってきた。そこで、「授業進行係り」に多くの授業運営を任せるようにした。

「授業進行係り」の仕事は、①号令係り（始め終了後の挨拶）②タイマー係り（問題解決学習段階のタイマー）③司会係り（全体司会者・各学習段階の司会）④板書係（意見や考察を板書）⑤言語わざ係り（本時で進める言語活動の言葉の伝達）⑥机配置係り（前向きか班会か教室の真ん中を向くのかの指示）⑦本時の教材掲示係り（資料や学習問題の掲示）⑧前時の振り返り発表係り（前時の振り返りを発表する）⑨見通し確認係り（課題解決が可能か、出来ない場合の対応の指示）⑩教科指導係り（課題解決が出来ない子への指導を担当）⑪授業内班長会（班会で話し合う内容や発表方法の伝達）⑫班会（班内の係りの指示と解けない子から発表の指示）⑬ノート・ワークシート係り（ノート展覧会や「ノーと回し」の指示）⑭参観者への対応係り（お礼の言葉）等だ。

ある研究授業が終わった時、泣いた子供がいた。その理由を尋ねると、「普段はもっとうまい司会が出来たのに」と言う言葉が返ってきた。授業に責任を負う姿に感動した。

◎教科の専門性を出す授業は、教師が光る。だが、子供には受け身となりやすい。教師が仕切る授業となりやすいからだ。そこで、「子供が進める学習活動」へ転換するとよい。それには、従来の子供の委員会を見直し、授業改善に関係する委員会を設置するとよい。